

2020年10月4日～10日 各家庭でのディボーション用テキスト

■暗黒における訓練（後編）

バプテスマのヨハネは、また別の方法でこの訓練を受けた。ヨハネは「燃えて輝くともしび」であり（ヨハネ 5:35）、多くの群衆は彼の火のように燃える説教に引きつけられた。彼はそのような人気と力の絶頂にあるときに、主イエスについて、「あの方は盛んになり私は衰えなければなりません」と言った（3:30）。おそらく彼は、その「衰え」が執念深いヘロデヤの憎悪、投獄、そしてついには屈辱的な死に方をすることを意味していたということを、予知していなかったに違いない。彼が暗黒の試練の中であってどれほど悩み抜いたかは、自分の弟子を通して、「おいでになるはずの方は、あなたですか。それとも、私たちは別の方を待つべきでしょうか」と主に尋ねたことばに、よく表われている（マタイ 11:3）。このようなたましいの激しい苦しみに答えて、主イエスは、「わたしにつまずかない者は幸いです」と言われた（6節）。暗黒における訓練は、私たちをつまずかせるかもしれない。しかし、私たちがもし神のみこころに従って、しっかりした土台の上に堅く立っているなら、明るみで教えられたことを、暗やみで疑うようなことはない。

ヨブは、だれも受けたことのないようなきびしい訓練を受けた。ヨブは光のうちを歩み、人の前に正しく歩み、神にもよしと認められていた（ヨブ 1:1, 8）。彼は神を敬う心の厚い人であり（5節）、物質的にも恵まれていた（3節）。至高者なる神は、ヨブについて、二度もくり返して言われた。「おまえはわたしのしもべヨブに心を留めたか。彼のように潔自で正しく、神を恐れ、悪から遠ざかっている者はひとりも地上にはいない」（1:8, 2:3）。ところがヨブは、突然驚くような出来事にあい、孤独、病気、失望に見舞われる身となってしまった。

ある神の子たちは、「たましいの暗黒の夜」を経験する。それは苦痛に満ち、いつ果てるともわからない、神がともにおられないかのように思われる経験である。健康は損なわれ、友人からは見放され、悪口を言われる。日は暗く、夜はあまりにも長く、あすも光の到来を約束してくれず、絶望を和らげることもしてくれない。ついには、このような苦難と悲哀の連続に身も心も疲れ果てて、むしろ墓石の下に

憩いたいとさえ思うようになる。しかし、このヨブのように、たとえようもないわびしさに襲われた人間がいるだろうか。彼は絶え間なく訴え続けた。「神が困いに閉じ込めて、自分の道が隠されている人に、なぜ、光が与えられるのだろう」

(3:23)。「ああ、私の願いがかなえられ……私を砕き、御手を伸ばして私を絶つことが神のおぼしめしであるなら」(6:8, 9)。「たとい私が雪の水で身を洗っても、灰汁で私の手をきよめても、あなたは私を墓の穴に突き落とし、私の着物は私を忌みきらいます」(9:30, 31)。「なぜ、あなたは御顔を隠し、私をあなたの敵とみなされるのですか。あなたは吹き散らされた木の葉をおどし、かわいたわらを追われるのですか」(13:24, 25)。

この暗黒は、影のように私たちに付きまとい、こうささやきかけてくる。「神は恵むことをお忘れになったのだ」、「神はおまえのことなどに、かまっておられないのだ」、「おまえがこのような暗黒の中にいるのは、神のみこころから外れたからだ。神が人を暗黒に導かれるはずはない」、「おまえは神に従わなかったから、捨てられたのだ」。サタンはこのような巧妙なわなを、あとからあとから、私たちのために仕掛ける。

しかし、この暗黒における訓練は、実はイザヤ書 50 章 10 節のすばらしい真理を教えてくれるのである。「あなたがたのうち、だれが主を恐れ、そのしもべの声に聞き従うのか。暗やみの中を歩き、光を持たない者は、主の御名に信頼し、自分の神に抛り頼め。」私たちは神だけに頼らなければならない。すべてのものに背かれても、神により頼み続けなければならない。このような暗黒にあるとき、私たちはともすればすべての望みを捨ててしまったり、自分かつてな火を燃やそうとしたりする(イザヤ 50:11)。しかし、その結果は、損失と悲哀を招くばかりである。心と思いをただ主だけに向けているならば、「主は直ぐな人たちのために、光をやみの中に輝かす。主は情け深く、あわれみ深く、正しくあられる」ことを、知ることができる(詩篇 112:4)。

暗黒における訓練とは、神が光の中であなたに語られたことを、暗やみで疑ってはならない、ということである。